２０１７年3月１８日

「東大阪市山地保全協議会アドバイザー派遣事業」講座

日本森林ボランテイア協会
丸　井　正　史

１．森林保全

自然保護とは自然に任せてよいものと、人間が関わらなければならない、人間の生活に密着した常に手入れしなければならないものがある。
知床半島、白神山地、屋久島、奈良奥山などは前者であるが、林業用の山、里山、竹林は後者である。

２．タケの生態

世代交代は有性生殖による種子ではなく、地下茎で行われるので気候変動に強く、１年で１０ｍ以上に生長する。

３．森林遷移でのタケの位置付け

日本古来のマダケは地下茎なので河川やため池の護岸等に使われていたが、１２０年周期で開花し枯れたり、テング巣病蔓延による衰退から、その後の１０～２０年は他の樹木が勢力を伸ばしてきた。その後またタケが繁茂してくるという繰り返しの経緯がある。いわゆる極相林までの遷移の途中段階で顔を出すイメージである。
モウソウチクの６７年目の開花は劣性遺伝の要素と考えられていることから、生態系のローテーションは期待できない可能性がある。

４．放置竹林の問題（放置したらどうなるか）

急速な広がりで他の樹木を圧倒。暗く枯れた竹が倒れ、鳥、昆虫や小動物も認められず、生物多様性が低下し、里山を荒廃させる。
荒廃した竹林は過密になると地下茎の伸長が低下し、枯死した地下茎が多くなり土壌を抱え留めすることができなくなることや、他の植生がないため表土が固くなって保水力が低下し、降雨による表土の流出や鉄砲水の発生する土砂災害の危険性が高くなる。
竹林の二酸化炭素吸収量は成熟した他の樹木に比べ低く、竹林が拡大すると吸収源機能が低下すると考えられている。

5．放置竹林の原因

木材輸入自由化、燃料革命、安い化学肥料の導入等により手入れしなくなったり、手入れする人の高齢化と減少、竹材利用の減少などが原因である。

6．竹林のあるべき姿

林内が明るく小高木が生える美しい林が目標。傘をさして歩ける程度の密度にするというのが昔からの言い伝え。。

但し、切って枝を落とし、短く切り整理するのは大変な作業で、継続して管理することが難しい。拡大を阻止するには１回の伐採では不十分で、数年にわたって何度も行わないと駆除できない。筍の発生時期に蹴倒すのは楽。

7．竹林整備の実際

（1）基本

・安全第一。ボランテイアの安全は個人責任。無理はしない。
・皆伐。枝払いせず、刈った竹は谷に。

（2）伐採

・２～３人ペアで、隣のグループとは３～４m離れる。
・作業場所から上に向かって隣のグループの境界まで刈る。
・まず枯れ竹を整理。
・刈る竹に別の竹がかかっている場合は、かかっている竹から刈る。
・地表にできるだけ近くの節のすぐ上を切る。
・通常、斜面の上側から切って下方向に倒す。倒すときは周りに人がいないことを確認すること。
・太い竹は、谷側に直径の1/4位切れ目を入れてから山側から切る。
・途中で縦に裂けることに注意すること。
・つるで他の竹に絡んでいる場合は、切り離して引っ張って倒す。